

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：12614

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02805

研究課題名（和文）「国際語としての英語」発音目標設定のために：使用目的と聞き手を考慮した実証的研究

研究課題名（英文）Setting Pronunciation Goals for English as an International Language: Evidence-Based Research Focusing on Purpose of Use and Listener Factors

研究代表者

内田 洋子 (Uchida, Yoko)

東京海洋大学・学術研究院・教授

研究者番号：50313383

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：現在の英語発音教育における学習者の達成目標は一般的に「コミュニケーションに支障を及ぼさないレベルの発音」とされているが、これは英語の使用目的や聞き手の母語に大きく依存する。本研究では、英語教員と航海士による英語使用を想定し、理解度・わかりやすさ・訛りの度合い・ふさわしさを測定する聴取実験を通して、各職種志望者が身につけるべき英語音声項目の優先順位を検討した。あわせて、英語発音に自信を持つことの大切さに関する調査も行った。得られた知見を元に、英語教員志望者に対する音声指導書を作成した。航海士志望者については、特定の目的のための英語という特性から、単語レベルの音声指導を行うことの重要性を見出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中学・高校の英語教員は、生徒のロールモデルとなるような発音の習得、航海士は、世界中の港湾・船舶との意思疎通において海難事故を引き起こさない発音の習得が要求される。従来の対照分析のみに基づいた問題の洗い出しや最小対を扱う画一的な練習ではなく、機能負担量の測定等から優先度の高い音声項目や発音のモデルとゴールの選定等を行い、学習者の心理面にも目を向け、各職種に合った音声指導を模索し、限られた学習時間で発音習得を効果的に行う方法を考案した。また、教職音声学では自身の英語発音に自信を持つことの大切さ、「特定の目的のための英語」である海事英語では、単語レベルで発音指導を行うことの大切さを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Currently, the objective of English pronunciation instruction is set to have the students achieve “pronunciation not hindering communication.” However, this goal can significantly vary depending on the purpose of English use and the listeners’ language backgrounds. In this study, we focused on English teachers and deck officers who were both native Japanese speakers. Through perception experiments measuring ‘intelligibility,’ ‘comprehensibility,’ ‘accentedness,’ and ‘acceptability,’ we proposed the priority of sound categories that pre-service English teachers and prospective deck officers should acquire. We also examined the importance of pre-service teachers’ confidence in their own pronunciation. Based on the findings, a pronunciation textbook for pre-service teachers was developed. For prospective deck officers, the results of the experiments emphasized the significance of word-level pronunciation instruction, considering the nature of English for specific purposes.

研究分野：英語音声学

キーワード：英語音声学 教職音声学 海事英語 intelligibility comprehensibility accentedness acceptability 特定の目的のための英語

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

英語学習における必要不可欠な項目の一つとして、英語音声の適切な使用がある。英語発音教育では、学習者が目指すべき達成目標は従来「母語話者並みの発音」という非現実的なものであったが、現在は「コミュニケーションに支障を及ぼさないレベルの発音」とするのが一般的となっている (Celce-Murcia et al. 2010)。これは、英語が国際語として用いられており、もはや英語を母語や第一言語として使う人々だけの所有物ではないことを考えても、自然な考え方といえよう。とはいえ、それが一体どのような発音であるかについては、これまで十分には示されてこなかった。

コミュニケーションの支障の有無は、聞き手の母語や英語の使用場面に大きく依存すると言われる。このことから、学習者が到達すべき発音は単一のものではなく、聞き手や使用場面に応じて変わってくる一定の幅を持ったものであると考えられる。たとえば、同じ日本語母語話者の発音であっても、聞き手がアメリカ人か中国人かによって、通じやすさは変わってくるであろう。また、英語教員を目指す学習者であれ、航海士を目指す学習者であれ、コミュニケーションの上で問題のない英語発音は必要不可欠なものであるが、英語の使用場面が異なる以上、何をもちてそれが達成できたと言えるかは異なるはずである。

しかしながら、本研究に着手した段階では、日本語を母語とする英語学習者の発音上の問題は一律に捉えられるのが一般的であり、学習者の背景や言語使用状況を考慮して、英語学習の目的の違いによって発音到達目標も変わってくるという視点を持つ研究は、我々の知る限り、存在しなかった。

2. 研究の目的

本研究では、英語発音の到達目標が異なる日本語母語話者が話す英語を、様々な言語背景を持つ聞き手が聴取する実験や調査を通して、使用目的や聞き手に応じた、日本人が目指すべき発音の幅の設定を試みた。

研究対象は中学校・高等学校の英語教員志望者および航海士志望者の2グループとし、それぞれの職種にとってコミュニケーションに支障のない適切な英語発音に到達するための指標を定めることとした。実験・調査を通して得られた知見から、英語教員志望者と航海士志望者それぞれの音声教育にあたって必要な要素を明らかにし、教職音声学教育および海事英語教育に活かすことが主要な研究目的であった。

3. 研究の方法

本研究では、最も伝統的な対照音声学 (竹林・斎藤, 2008) をスタート地点として、誤用分析、国際語としての英語 (Jenkins, 2000; Walker, 2010; 清水, 2011) および各職種の英語使用の実態やニーズ (Bocanegra-Valle, 2013; International Maritime Organization, 1993, 2002, 2015) も踏まえつつ、アンケート調査や、理解度 (intelligibility) ・わかりやすさ (comprehensibility) ・訛りの度合い (accentedness) ・ふさわしさ (acceptability) について聴取実験を通して測定する手法 (Derwing & Munro, 2015) などを用いた。

実施した10種類の研究に具体的にどのような手法を用いたかについては、次項「4. 研究成果」を参照のこと。

4. 研究成果

A. 英語教員志望者を対象とした研究成果

(1) 中学校教科書に収録されている音声項目および音声変種に関する調査 (成果: Sugimoto & Uchida, 2018a)

調査の第一歩として、中学・高校の英語教員が扱う音声項目が何かを明らかにすることが必要である。

そこで、文部科学省認定の中学校英語教科書6種類各3冊中の音声指導に関する内容を網羅的に抽出し (Sugimoto & Uchida, 2015)、それら教科書に付属する音声教材の英語変種及び発話速度を調査した (Sugimoto & Uchida, 2016a) 結果を元に、詳細分析を行なった。

発音記述と練習問題の傾向および音声教材の変種を明らかにすることにより、教員にとって英語音声に関する知識獲得が重要であると同時に、音声教材で扱われている変種が北米英語中心であることに対して多様な音声変種の存在に目を向けることの重要性が指摘された。

(2) 現役教員の英語発音に対する自信、知識、指導に対する態度のアンケート調査 (成果: Uchida & Sugimoto, 2018, 2020a)

次に、現場の教員たちの英語発音指導に対する考え方およびそのベースとなる自身の英語発音の捉え方についても知る必要があると考えた。

そこで、東京都内の現役の公立中学校英語教員 100 名に対して、74 の質問から成るアンケート調査を行なった。

分析から音声指導の実態及び音声知識の有無が解明され、教員の正しい音声知識と発音指導能力の重要性が示された。

指導上の発音のモデルや到達目標には、母語話者の英語変種を選ぶ傾向が確認された。教員の大多数は、語と比べると文やパッセージの発音に自信を有していないこと、海外経験が発音に対する自信に良い影響をもたらしていること、また、共分散構造分析により、自身の発音に自信を有していることが発音指導への前向きな態度につながる事が明らかとなった。

(3) 教員志望者の考える英語教員が目指すべき発音についての調査 (成果: Uchida & Sugimoto, 2017a, 2020b)

(2)の結果を受けて、教員の自信の有無が何に起因しているかをさらに掘り下げて追究する必要があると考えた。

そこで、16 名の日本人英語教員志望者に対して、「明瞭度の高い発音」「国際共通語としての英語」に関する論文記事を読んだ上、「英語教員はどのような発音を目指すべきか」というテーマでエッセイを書いてもらった。得られた回答を「教員の役割」「母語話者発音」「わかりやすさ」等、5 つの項目に分けて分析を行った。

反復プロセスを用いた分析の結果、教員志望者が「英語母語話者の発音」と「日本語の痕跡が残った発音」の 2 つの間で葛藤する気持ちを抱えていることが明らかとなった。また、これを克服するために、実際の言語使用の場面における多様な音声変種の使用について知ることの大切さが指摘された。

(4) 教員として「ふさわしい」発音とは? (成果: Sugimoto & Uchida, 2017, 2018b, 内田・杉本, 2018)

教員の発音は生徒のモデルになることから、ただ理解できる発音ではなく、教員としてふさわしい発音が求められると考えた。そこで、ふさわしい発音とは何か、また聞き手による評価の違いについて、調査を行った。

教員志望者 20 名の英語発音を英語母語話者・日本人教員・日本人学生の 3 群 (各 10 名) に聞かせ、「教員としての発音のふさわしさ」「なまり」について 9 段階で評価してもらった。「ふさわしさ」と「なまり」には各群内で相関があり、ふさわしくない教員の判定は 3 群で共通する傾向が見られた。

また、同じ音声を英語・日本語・中国語の母語話者 3 群 (各 10 名) に提示し、同様に評価してもらったところ、各群内の「ふさわしさ」「なまり」の評価には高い相関が見られ、「なまりの強い・教員にふさわしくない」発音のイメージは共有されていたものの、「なまりが少ない・教員にふさわしい」発音のイメージは群による違いが見られた。また、評価には非母語話者にのみ共通した点も観察された。また、自由記述より「ふさわしさ」の判定には「なまり」以外の要因 (例: 発話速度・わかりやすさ・明瞭度・流暢さ) があることも判明した。

(5) 日本人英語教員のための音声学 (いわゆる教職音声学) の教授内容の検討と提案 (成果: 杉本・内田, 2018, 2020a)

(1)~(4)の研究結果をふまえて、教員志望者が履修する音声学の授業で、英語教員志望者に対して教授すべき音声学の知識および実践力について報告した。

教職音声学の授業において、発音モデルには一般米語を用い、聞き取りモデルとして多様なアクセントに触れる機会を設ける必要があること、授業には「宣言的知識 (音声学的知識)」「手続き的知識 (音声指導に関する知識)」「発音および聞き取り力の訓練」の 3 つの要素を含めること、「理解できる英語発音」をゴールと設定して自信を持たせること、明瞭度の高い発音につながる音声項目の選定や機能負担量等を元に教授内容の優先順位をつける重要性等について論じた。また、教職音声学の目標として、次の 4 つを設定した: ①英語の多様性に対する理解を深める ②音声学に関する基礎知識を身につける ③音声指導に関する知識や手法を、自身の発音・聞き取り練習を通して身につける ④教員として生徒のモデルになれるような、明瞭度の高い発音を身につける。

(6) 日本人英語教員のための音声学 (教職音声学) の教科書制作 (成果: 内田・杉本, 2020)

(5)の成果をふまえて、教職音声学授業の教科書として使用可能な書籍を作成した。

英語教員に必要な「発音と聞き取り力」「音声学の知識」「音声指導の技術」を三本柱として立て、42 の Q&A の形式で書かれている。

「音声指導の知識編」では、英語がどのような言語であるか、音声指導のモデルとゴール、音声学の基礎知識について説明し、非母語話者の英語教員が発音を教えても良いこと、また、優先して教えるべき音があることについても述べた。

それに続く「音声指導の実践編」では、音声指導の授業へのもりこみ方を説明した上で、フォニックスやカタカナ英語の使用の是非、辞書の活用法、発音の評価法、リスニングの素材選びの方法についてふれ、談話レベルの発音と単語レベルの発音の指導法について紹介した。説明だけでなく、教室で使用可能な「指導アイデア」(練習問題)も各音声項目についている。

(7) 日本語を母語とする英語学習者の母音の明瞭度と適合度の評価 (成果：杉本・内田, 2020b)

国際共通語としての英語ではとくに重要度の高い母音と指摘され (Jenkins, 2000)、対照分析では START 母音との混同が多いとされる (竹林・斎藤, 2008) NURSE 母音 (Wells, 1982) の発音上の問題点を明らかにすることを目的として、聴取実験を行った。

日本語母語話者 10 名が発音した 6 つの母音(NURSE-START, KIT-FLEECE, GOAT-THOUGHT)を含む 24 単語 (6 母音×4 語 ; (例) firm, farm; ship, sheep; boat, bought) を 12 名のアメリカ英語母語話者に聞いてもらった。聞き手は、①明瞭度タスク (聞いた単語をタイプアウトする) と②適合度タスク (聞いた単語の母音を 7 段階で評価する) に取り組んだ。

NURSE 母音の正答率 (話し手の意図どおりに聞き手が認識した率) は、THOUGHT 母音と並び、他の母音群よりも低く、正しく認識できた場合の適合度評価も、NURSE 母音が THOUGHT 母音と並んで他の母音よりも低かった。意図した母音とは異なる母音と認識された場合の適合度については、NURSE 母音の評価が最も低かった。さらに、NURSE 母音は他の母音と比較して、誤って聞き取られた母音のバリエーションが多いことが明らかになった。

(8) 非母語話者英語教員による発音指導の評価信頼性 (成果：Uchida & Sugimoto, 2021)

非母語話者英語教員による発音指導の評価は、信頼できるものであるかについて調査した。

9 名の日本語を母語とする教員志望者が 10 名の日本人英語学習者が発音する、6 つの母音 (NURSE-START, KIT-FLEECE, GOAT-THOUGHT)を含む 24 単語 (6 母音×4 語 ; (例) firm, farm; ship, sheep; boat, bought) を聞いて書き取った。これと同様のタスクを英語母語話者が行った結果と比べたところ、2 グループには類似点と相違点の両方が観察された。

2 グループで KIT-FLEECE の母音の回答は類似していたものの、他の母音には違いが見られた。たとえば、母語話者は NURSE を NURSE と聞き取ったが、教員志望者は START と聞き取る傾向があった。また、GOAT-THOUGHT の聞き取りにおいて、教員志望者は子音環境や母音の質・長さの影響を受けやすい傾向が見出された。

得られた結果より、教員志望者が適切に発音評価を行うための訓練の必要性が示唆された。

B. 航海士志望者を対象とした研究成果

日本語母語話者の航海士の海事英語を発音する際の問題点として、カタカナ語の影響がある。これにより、伝統的な音声学で扱われてきた、母語の干渉による体系的な音声間違い(global error; GE)だけではなく、特定の単語が母語の干渉を原因としないものの原語とは大きく異なった形で記憶される単語固有の発音間違い(local error; LE)も生じる (Szpyra-Kozłowska, 2015)。この LE がどのような単語に見られるかを明らかにし、その音声的音韻的特徴を GE とともに観察し、それぞれの音声間違いが聞き手にどのように聞かれるかを確認した上で、適切な指導方法を検討する必要がある。

(1) 日本語母語話者航海士の海事英語発音における問題点の音声分析 (成果：Uchida & Sugimoto, 2022)

カタカナ語化している 65 語の海事用語を 15 名の航海士志望者が発音したものを 2 名の音声学者が聴取した。音声表記を行った上、発音間違いを指摘し、間違いの種類が LE か GE かを特定し、音声的・音韻的特徴の記述を行った。

GE として、日本語/r/の使用、英語/ɑ:/に [a:]、/æ/に[a] の使用、子音連続への母音挿入が観察された。LE として、カタカナ語の影響と見られる tool, channel, pirate といった語の発音間違い、ローマ字発音による launch, meter の発音間違いなどが明らかとなったが、GE, LE 両方の点から説明できる発音間違いもあった。長い単語ほど複数の発音上の問題が生じやすかった。また、発音が難しいと感じるとカタカナ発音に切り替える学習者もみられた。必ずしも克服することが難しい発音であっても、カタカナ発音が化石化して定着しているケースもあった。

海事英語は特定の目的のための英語として使用され、一定数の語彙から構成されるため、散見される LE の間違いに注目し、単語レベルで発音間違いを克服することが望ましそうである。

(2) 日本語母語話者航海士の海事英語発音の理解度 (intelligibility)調査 (成果：Uchida & Sugimoto, accepted, 2023 年 8 月発表予定)

航海士志望者による海事英語発音について、アメリカ英語母語話者を聞き手として聴取実験を行い、理解度を測定した。

30名の航海士志望者が発音した65の海事用語を65名のアメリカ英語母語話者に1回に1語ずつ提示し、書き取ってもらった。話者が意図した語を正しく書き取った正答率は、語により1.5%から92.3% (平均45.8%)の幅があった。単音節語は他音節語よりも理解度が低く、GEとLEの両方が理解度に影響を与えた。大きな個人差も観察され、個々の学習者に対する発音指導を行うことが必要であると考えられる。また、海事英語は特定の目的のための英語として使用されるという観点から、個々の音や最小対だけではなく、単語レベルで困難な音声に注目して、語の発音全体を習得させるアプローチが必要であることが示唆された。

C. 今後の課題

英語教員志望者のための目標設定については、A(6)という形で一定の成果は得られたと考える。しかし、A(6)を使った授業を通しての学習の成果がどれくらいのものになるかについては、今後、データを収集して検討する必要がある。また、発音の習得は授業だけで達成できるものではないため、授業外の時間を利用して学習させるような工夫が必要である。授業外の時間にオンライン学習を利用するなど、テクノロジーを活用することも一案であろう。さらに、理解度・わかりやすさは、冒頭にも述べたとおり、使用場面や話者と聞き手の関係性など様々な要因に影響されるため、実体の解明には今後もさらなる研究が求められる概念であり、課題は多く残っている。

海技士志望者のための目標設定については、特定の目的のための英語という特性に着目し、特にLEが起きやすい単語や句に焦点を当てることの大切さが明らかとなったものの、理解度・わかりやすさの解明はまだ道半ばである。聞き手をアメリカ英語や中国語以外の母語話者に広げたり、海事英語の無線交信に特有の無線のノイズ下での状況での聞き取りを調査してみたりということも必要になるだろう。また、学習が必要な単語や句の発音指導をどのように行うかも今後の課題である。海事英語の授業時間だけではやはり十分な学習効果は得られないため、オンライン学習の実施を検討していきたい。

参考文献

- 清水あつ子. (2011). 「国際語としての英語と発音教育」 『音声研究』 15(1), 44-62.
- 竹林滋・斎藤弘子. (2008). 『新装版 英語音声学入門』 東京: 大修館.
- Bocanegra-Valle, A. (2013). "Maritime English." In C. A. Chapelle (ed.) *The Encyclopedia of Applied Linguistics*. (pp. 3570–3583). Oxford: Wiley-Blackwell.
- Celce-Murcia, M., Brinton, D. M., Goodwin, J. M. (with Griner, B.). (2010). *Teaching pronunciation: A course book and reference guide*. New York: Cambridge University Press.
- Derwing, T. M., & Munro, M. J. (2015). *Pronunciation fundamentals*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- International Maritime Organization (1993). *STCW 1978: International Convention on Standards of Training, Certification and Watchkeeping for Seafarers, 1978: with Resolutions Adopted by the International Conference on Training and Certification of Seafarers, 1978*. London: IMO.
- International Maritime Organization (2002). *IMO Standard Marine Communication Phrases*. London: IMO.
- International Maritime Organization (2015). *IMO Model Course 3.17: Maritime English*. London, England: IMO.
- Jenkins, J. (2000). *The phonology of English as an international language*. Oxford: Oxford University Press.
- Sugimoto, J. & Uchida, Y. (2015). An analysis of Japanese junior high school textbooks as pronunciation teaching materials. *Proceedings of the Phonetics Teaching and Learning Conference*, 91-95.
- Sugimoto, J. & Uchida, Y. (2016). A variety of English accents used in teaching materials targeting Japanese learners. *Proceedings of ISAPh2016: Diversity in Applied Phonetics*, 43-47.
- Szpyra-Kozłowska, J. (2015). *Pronunciation in EFL instruction: A research-based approach*. Bristol: Multilingual Matters.
- Walker, R. (2010). *Teaching the pronunciation of English as a lingua franca*. Oxford: Oxford University Press.
- Wells, J. C. (1982) *Accents of English I: An introduction*. Cambridge: Cambridge University Press.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 6件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 杉本淳子、内田洋子	4. 巻 24
2. 論文標題 英語教員養成における音声学教育－日本人英語教員のための「教職音声学」試案－	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 音声研究	6. 最初と最後の頁 22-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24467/onseikenkyu.24.0_22	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Uchida, Y., & Sugimoto, J.	4. 巻 44.1
2. 論文標題 Pronunciation goals of Japanese English teachers in the EFL classroom: Ambivalence toward native-like and intelligible pronunciation	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 The Language Teacher	6. 最初と最後の頁 3-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.37546/JALTTTL44.1-1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Sugimoto, J., & Uchida, Y.	4. 巻 -
2. 論文標題 Accentedness and acceptability ratings of Japanese English teachers' pronunciation	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Proceedings of the 9th Pronunciation in Second Language Learning and Teaching conference	6. 最初と最後の頁 30-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Uchida, Y., & Sugimoto, J.	4. 巻 -
2. 論文標題 Non native English teachers' confidence in their own pronunciation and attitudes towards teaching: A questionnaire survey in Japan	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 International Journal of Applied Linguistics	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/ijal.12253	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Sugimoto, J., & Uchida, Y.	4. 巻 130
2. 論文標題 How pronunciation is taught in English textbooks published in Japan	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Seishin Studies	6. 最初と最後の頁 3-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Uchida, Y., & Sugimoto, J.	4. 巻 14
2. 論文標題 A survey of pronunciation instruction by Japanese teachers of English: Phonetic knowledge and teaching practice	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Journal of the Tokyo University of Marine Science and Technology	6. 最初と最後の頁 65-75
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計8件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 4件)

1. 発表者名 Yoko UCHIDA, Junko SUGIMOTO
2. 発表標題 Nonnative preservice teachers' evaluation of three English vowel pairs by Japanese speakers
3. 学会等名 Pronunciation in Second Language Learning and Teaching Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 杉本淳子、内田洋子
2. 発表標題 日本語母語話者による英語NURSE母音の発音：明瞭度と適合度の評価
3. 学会等名 日本音声学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 杉本淳子・内田洋子
2. 発表標題 英語教育・英語教員養成における音声学教育
3. 学会等名 日本音声学会（第337回研究例会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 内田洋子・杉本淳子
2. 発表標題 日本人教員の英語発音:英語・日本語・中国語母語話者による「ふさわしさ」の評価
3. 学会等名 日本音声学会（第32回全国大会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Uchida, Y., & Sugimoto, J.
2. 発表標題 Towards the implementation of ELF-oriented pronunciation teaching in Japan
3. 学会等名 ELF10 and changing English: 10th anniversary conference of English as a Lingua Franca (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Sugimoto, J., & Uchida, Y.
2. 発表標題 Accentedness and acceptability of Japanese English teachers' pronunciation: Ratings by three listener groups
3. 学会等名 Paper presented at the conference of Pronunciation in Second Language learning and Teaching (PSLLT): Bridging L2 pronunciation research and teaching (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Uchida, Y., & Sugimoto, J.
2. 発表標題 Phonetic characteristics of Maritime English terms pronounced by Japanese deck cadets.
3. 学会等名 The Thirty-Sixth General Meeting of the Phonetic Society of Japan.
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Uchida, Y., & Sugimoto, J.
2. 発表標題 Intelligibility of Maritime English terms pronounced by Japanese deck cadets.
3. 学会等名 20th International Congress of Phonetic Sciences, ICPhS 2023 <accepted> (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 内田洋子、杉本淳子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 研究社	5. 総ページ数 204
3. 書名 英語教師のための 音声指導Q & A	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	高木 直之 (Takagi Naoyuki) (30272727)	東京海洋大学・学術研究院・教授 (12614)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	杉本 淳子 (Sugimoto Junko) (70407617)	聖心女子大学・現代教養学部・准教授 (32631)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関